

# 環境領域の保育活動と保育士養成校における自然環境教育

## Nature Activities in Childcare Centers and the Education for Natural Environment in a Professional Training College

前 迫 ゆ り

MAESAKO Yuri

将来、保育士をめざす学生自らの自然への理解を深め、感性を高めること、さらに「自然」というものを保育活動にどのように生かし、子どもの健全な育成につなげていくかは重要な教育的課題である。しかし大学生の自然観形成は十分とはいえず、保育や幼児教育の場において、ときにまちがった自然教育さえ行われている場合がある。本研究は地域の子育て環境づくりに向けての保育者養成における可能性と将来展望に関する学際的基礎研究の一環として実施されたものである。2歳児から6歳児の「子どもが自然とかわる」保育活動内容の現状および保育士養成校にたいする保育所からの具体的提言「保育士養成校に望むこと」について報告する。さらに、子育て環境づくりに貢献する人材育成に向けて本学がとりくんでいる自然環境教育の一端を提示しながら、保育所からの示唆とともに、保育所および保育士養成校において自然環境教育を推進するにあたっての課題を考察する。質問紙調査による保育所の保育士養成校への要望は、まず、保育士をめざす学生が野外活動などを体験することにより、自然への興味および実践力をつけること、そして自然への感性を磨き、野外でも柔軟に対応できる保育士を養成することであった。保育士養成校においてはカリキュラムの充実、地域との相互交流およびボランティア活動などを通して、フィールドワークを核としながら、地域特性を生かした「子育て環境づくり」に貢献できる人材育成をめざす必要がある。

キーワード：自然体験学習、フィールドワーク活動、自然環境教育、専門職養成校、地域の子育て環境

Key Words : Direct experience learning, Fieldwork activity, Education for natural environment, Professional training college, Regional child-rearing environment

### はじめに

「環境による保育」が強調されて久しいが、「環境」という言葉はきわめて多様な意義と意味をもつ。上野(1999)は、物的環境構成をはじめとして、子どもの生活に欠けがちな領域「環境」とりわけ自然、さらには保育をめぐるすべてを含めた発達環境も含めて「環境」と捉えており、その意味するところは多様である。そうした子どもをとりまく多様な「環境」は多くの問

題点を抱えており(吉田1998、北本1998、小川1998)、さまざまな複合要因からなる問題に対応すべく、1994年12月、文部・厚生・労働・建設4省合意の元に、「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」というエンゼルプランが示され、その後1999年12月には「保育サービス等子育て支援サービスの充実」、「地域で子どもを育てる教育環境の整備」、「子どもたちがのびのび育つ教育環境の実現」などの内容を

含む新エンゼルプラン（厚生労働省「全国児童福祉主管課長会議目次」, [http://www1.mhlw.go.jp/shingis/s0003/s0309-1\\_18.html#](http://www1.mhlw.go.jp/shingis/s0003/s0309-1_18.html#), 2005. 3. 参照）が示された。

子どもをとりまく「環境」が意味するところはきわめて多様であるが、本稿では「自然」に視座をおいた「環境」と子どもとのかかわりについて考えたい。「身近な動植物に親しみ、いたわったり、進んで世話をしたりする」、「季節により自然に変化があることが分かり、それについて理解する」（6歳児の保育内容より抜粋）というように、自然への理解を深めながら、子どもを育むことの重要性は、保育所保育指針（厚生省児童家庭局1999）に明記されている通りである。同様に、幼稚園教育要領（文部省1999）の「環境」においても、「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ」ことが幼稚園で培われる、生きる力の基礎の1つであると明記されている。

河合（1998）は「現在、子どもをとりまく環境は相当悪くなっている」と指摘しており、その理由の第1義に、子どもが育っていくうえで大切な「自然」が破壊されていることをあげている。また、（河合1990, 2003）は子どもと自然とのつながりを考える際、身体的・心理的・社会的に人間存在として獲得してきた諸性質を「内なる自然」と位置づけ、この内なる自然と外界の自然が調和することが、人間性をふくよかに育てるのであり、子どもの健全な発達と自然と人間の共生が重要であるとしている。さらに「自然が子どもを強くする」という視点に立ち、子どもの発達・成長過程において自然とのかかわりをもつことが重要であると主張している。

「子ども」の育みにおいて「自然」へのまなざしや理解は保育において重要な視座とされている。しかしながら大学生の自然観形成は十分とはいえず、保育や幼児教育の場において、ときにまちがった自然教育さえ行われていることが指摘されている（沼田1982, 1987; 前迫・菅沼2000; 前迫2002; 養老2003）。したがって保育士をめざす学生自らの自然への理解を深め、感性を高めること、さらに子どもと自然とのかかわりを保育活動にどのように実施し、子どもの健全な育成につなげていくのかという視座は保育士養成校にとっても重要な教育的課題である。

地域の子育て環境づくりに向けての保育者養成における可能性と将来展望に関する学際的基礎研究」（研究代表 前迫ゆり）として2004年に実施された奈良県内全保育所を対象とするアンケート調査（質問紙法）から、保育所の現状や保育所が抱える問題点や課題が調査され、子育て環境を充実させるうえで、地域社会における保育所と関係諸機関との連携、保育士養成機関と保育所との連携の必要性などが浮かびあがってきた（前迫編, 2004）。なかでも、「子どもが自然環境に親しみ、生物のしくみの不思議さや生命の育みを感じることは保育にとって大切か」という問いに対して、87.0%が「とても思う」と回答しており、「保育士養成校において自然環境や生物への理解をさらに深める授業が必要か」という問いにたいしても、69.6%が「とても思う」、14.1%が「やや思う」とする回答が得られた。「自然とかかわる活動を実施するにあたって、保育士養成校に望んでいること」にたいしての回答（自由記述式）は、58.7%の保育所が回答を寄せており、自然活動にたいしての関心度と積極性がうかがえた。

具体的に取り組んでいる自然活動（20項目）として上位を占めたのは「園周辺域での自然観察」（87.0%）、「園庭で草花を育てる」（83.7%）、「昆虫飼育」（82.6%）、「芋掘りやイチゴ狩りなど」（80.4%）、「草花遊び」（79.3%）、「園庭内自然観察」（76.1%）などであった（前迫ほか, 2004）。これらの回答から、いずれも自然活動を保育にとりこんでいる現状は示された。

本稿では2004年に質問紙法によって得られた回答をもとに、（1）2歳児から6歳児の「子どもが自然とかかわる」保育活動内容の現状およびそれを実施する上での問題点、（2）保育士養成校への要望についてそれぞれ報告する。一方、「子育て環境づくりに貢献する人材育成」に向けてとりこんでいる自然環境教育に関する教科を提示しながら、保育所および保育士養成校において自然環境教育を推進するにあたっての課題を考察する。

### 調査方法

奈良県内の全保育所215園を対象に、質問紙調査を実施した。調査は2004年2月13日に調査票を郵送、2月29日までに郵送により回収した。調査用紙への

回答は保育所の代表の方とした。有効回収率は42.8%であった。調査内容は、大きく分けて、Ⅰ保育所概要、Ⅱ子育て支援サービス、Ⅲ他機関・団体などとの連携、Ⅳ保育活動と自然、Ⅴ保育とジェンダー、Ⅵ子育て環境作りに必要な保育士養成への要望などの項目からなる。これらは質問紙法の多肢選択法と自由記述法によって回答された。多肢選択法において回答されたⅠからⅥの集計結果についてはすでに報告している(前迫編, 2004a)。

本稿では「Ⅳ保育活動と自然」において自由記述法によって得られた回答を抜粋して報告する。さらに本学でのカリキュラム内容を提示して、保育現場で必要とされる保育士にとって必要な自然教育に関する課題の整理を行う。

### 結果および考察

#### 子どもが自然とかかわる保育活動

2歳児から6歳児までの保育内容「環境」のなかから、自然とかかわる保育活動の内容および実施上の問題点などについて自由記述式で得られた回答から抜粋して付表1に示した。選択肢において「園周辺域での自然観察」はいずれの園でも行われていることはすでに報告しているが(前迫ほか, 2004)、自由記述法においてはそれらに地域性や季節性を生かしたとりくみがなされている現状をうかがい知ることができた。各年齢毎に、活動内容が異なる保育所もあれば、年齢に関係なく、合同でとり組んでいると回答した保育所もあった。共通していることは、昆虫採集や植物・落ち葉などの採集など、身近な自然を生かした活動が行われており、小動物、昆虫の飼育・観察、花卉・野菜の栽培などの活動は、日常において取り組むことができる活動内容であるということであった。「五感をつかって自然を感じ、体験する」ことで、身体的にも、精神的にも、子どもの発達に貢献するという点において、「自然活動(野外活動)が必要」とであるという認識は共通しているといえる。

しかし山(森)、川、野原などの野外にでたり、動植物に直接触れるなどの体験は「安全性や衛生面」などの点から希薄になりがちであるという記述が多くなされた。とくに野外での自然活動は安全面のうえで多

くの配慮が必要とされるため、年齢に応じたとりくみが難しいなどの問題点があげられた。安全性ということが最重要視される要素は近年、きわめて高くなっており、保育所外での活動は今後、ますます難しくなる現状がある。一方、「野外で子どもが自然とかかわる活動こそが、まさに子どもたちの生命観を育み、心身共に健全な保育をめざすうえで重要」とであるという点は、保育所共通の認識であり、課題であることも調査結果から示唆された。

地域の特性を生かし、伝統行事と野外活動をつなげていくというとりくみも報告されており、地域で子どもを育むという視点は、現在希薄になっている点であるが、今後ますます重要になると思われる。

子どもが自然とかかわる保育活動を実施するにあたって、安全性、衛生面、自然環境に乏しいなどの指摘は多くあげられたが、保育士の現場での対応が十分ではない、自然にたいして、あるいは生きものにたいしての関心度が低いといった点も指摘された。これについて次項で述べる。

#### 保育所から保育士養成校への提言

保育所では自然を通して、動植物との直接的体験を推進し、子どもたちに生き物に対する感性や生命観を育んでいくことが重要であるという認識をもって実施されており(付表1)、保育活動内容に自然と子どもが関わるとりくみがなされている現状は前述の通りである。これらの自然活動をより活発に、かつ充実したものとするために、保育士養成校でのとりくみに関する保育所からの具体的要望について調査を実施した。このアンケート項目にたいする回答率は57.6%、53園であった(付表2)。

この要望は、保育園での自然体験活動や飼育・栽培・観察などのとりくみを反映しており、保育士養成校においてより一層の自然環境教育の推進を支持するものと考えられる。付表2をもとに回答を項目毎に分類して、数値化を試みた結果、「動植物に関する基本的知識の必要性」(32.7%)、「直接的体験・フィールドワーク活動など」(55.8%)、「自然への興味および実践力」(42.3%)などに大別された(表1)。

表1 保育所から保育士養成校に対するとりくみ提案(%)。資料2の回答をもとに項目比率を算出(自由記述式回答：N=52)。

要望事項	%
動植物に対する基礎的知識	32.7
動植物の名前や生態など	30.8
生物の危険性(安全性)	1.9
直接的体験・フィールドワーク活動など	55.8
飼育・栽培・観察・農作業体験	19.2
自然活動・自然体験・フィールドで活動する力	17.3
自然を生かした遊び(草花遊びや泥団子など)	11.5
動植物にさわなどの直接的体験	7.7
自然への興味・関心・感性および実践力	42.3
実践の場に対応する柔軟性および実践力	11.5
感性・五感を磨く	11.5
自然に対する興味と関心と意欲	19.2

これらの具体的提案は、まさに書物からの知識のみではなく、フィールドワーク(野外活動)を通して、実際に生物の姿を知ることが重要であると同時に、基礎的知識も不可欠であるとするを指摘している。さらにそれを生かす実践力や柔軟性を培う必要性と、何よりも将来保育士をめざす学生の自然への興味と関心が重要であるとするバランスのとれたとりくみを望む意見として捉えることができる。

保育士養成校において充実、強化の必要性があると思う教科を、本学カリキュラムから抜粋した33教科から5教科選択で得られた回答によると、選択頻度の高い教科は、「発達心理学」(44.6%)、「保育内容人間関係」(38.0%)、「保育実習」(38.0%)などであった。「子どもと自然」(17.8%)という教科においても、比較的高い数値が得られた。

奈良県内保育園のアンケート調査結果により「学生の自然にたいする興味と関心が必要である」という回答は90%を越えており(前迫ほか, 2004)とあわせて、自然にたいする興味の動機づけの重要性と自然活動に関する学生の積極的なとりくみを要望するものであり、関連教科内容の充実を期待する保育現場の声と考えられた。

## 自然観形成に向けての試み：保育士養成カリキュラムにおける自然環境教育

幼児教育科カリキュラムの1つである専門科目「子どもと自然」は、生物・生態に関する基礎的事項や子どもと自然とのかかわりを学習するための講義において、学生の自然にたいする興味と関心を喚起するため、フィールドワーク(観察・調査・植物採集・昆虫採集など)、自然素材をもちいた遊具・オブジェ・教材などの制作などを実施している。さらにそれらの活動のみでは獲得が難しいと思われる「自然を五感で感じる」といった感性を磨くために、環境教育プログラムの1つである「ネイチャーゲーム」を導入している。

これら教科内容を生かす実践力、柔軟性、積極性を培うために保育の場や地域交流の場におけるボランティア活動を支援しているが、2006年度はJAならけん主催のキッズ活動に本学学生も参加・協力するなど(本学webサイト：大学案内>大学広報>[http://www.narasaho-c.ac.jp/college\\_info/event2.html](http://www.narasaho-c.ac.jp/college_info/event2.html) 参照。2006.11現在)、多くの学生がボランティア活動を体験している。さらにこうした教科の取り組みを発表し、地域社会との相互交流を促進するために、全学的なとりくみとして学生展(学外会場で実施)を実施している。こうした地域活動もまた、学生の人間形成および「子育て環境づくりに貢献する人材の育成」推進に寄与するものと考えている(図1)。

これらのとりくみが、学生の自然観形成にどの程度、寄与したかを即座に評価することは困難であるが、学生のレポート報告を通してこれらのとりくみの有効性を評価している。

### 子どもと身近な自然

園庭で子どもの遊びのようすを観察していた折、昆虫にきわめて興味をもって活動している子ども(男子)を見つけた。ほとんどの子どもたちが、砂場や遊具で遊んでいるなか、一人、もくもくと昆虫網をもって虫を追いかけている。その子どもの昆虫にたいする知識はとても豊富で、実習中の本学学生をはるかに超えている。その子どもは芋畑近くで発見した虫を追いかけて、芋畑に踏み込み、やがてゆるやかな丘にもかけあがり、ひたすら虫を追いかける。20分くらい、昆虫

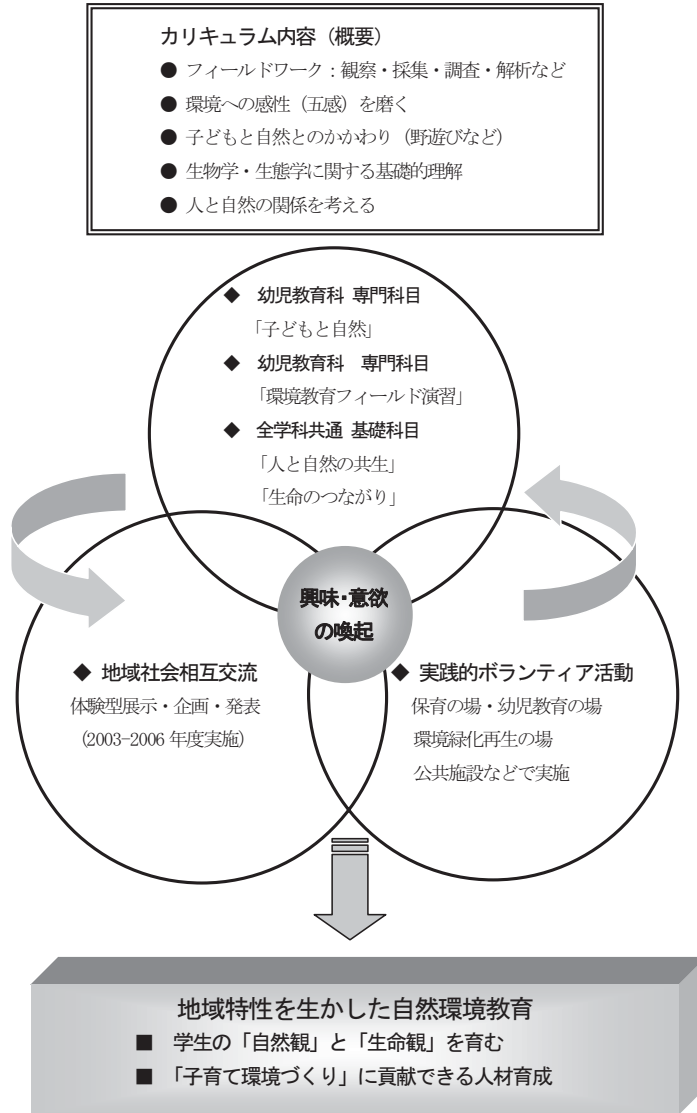


図1 専門職養成校における自然環境教育の構成と取り組みの視座.

を追いかけたが、残念ながら昆虫をつかまえることはできなかった。

実習中の学生は、この子どもとどのようにかかわればいいのかかわからないようで、あまりこの子どもとかわろうとしない。私は夢中でこの子どものあとを追いかけて、ときおり話しかける。すると一生懸命に虫の話をしてくれる。昆虫を追いかける子どもの目は真剣で、この感性と体験こそが子どもを育むと心から思えたのであるが、将来、保育士や幼稚園教諭をめざす学

生にとって、自然をどのように保育に生かすかは難しいテーマである。その難しさの要因として、学生自身が自然にたいして関心が低く、自らの自然観や生命観を確立していないことがあげられる。一方、子どもたちも園庭活動において、いつも植物や動物と遊ぶのが好きとは限らない。たとえば虫を探そうとしても、手入れが行き届きすぎた園庭にはおよそ雑草というものが生育していない。すると、バッター匹すら見つけることが難しい場合もある。園庭環境と子どもの遊びと



の関係、園庭でどのように自然への育みを行うか、園庭整備を含めて考える必要がある。

これは安全性の面から園外保育が困難であるというアンケート調査結果(付表1)と考え合わせて、今後、考えるべき保育所の課題ともいえる。園庭で昆虫をつかめたり、落ち葉を拾ったり、植物の成長を観察することは、野菜などを育てる場所の確保とあわせて、必要とされる園庭環境であろう。

### 環境教育プログラム：ネイチャーゲームリーダー養成講座の導入

本学にネイチャーゲームを導入して3年目を迎える(本学 web サイト：学科の紹介>ネイチャーゲーム>[http://www.narasaho-c.ac.jp/subject\\_info/nature\\_game.html](http://www.narasaho-c.ac.jp/subject_info/nature_game.html);[http://www.narasaho-c.ac.jp/subject\\_info/nature\\_game\\_2005.html](http://www.narasaho-c.ac.jp/subject_info/nature_game_2005.html) ほか参照, 2006. 11 現在)。奈良県最初のネイチャーゲーム課程認定校として、本学カリキュラムにネイチャーゲームリーダー資格取得のための講座を設けている(図2-図4)。子どもをとりまく環境に自然は大切とよく言われるが、それほどには、学生の幼児期の自然体験は多いとはいえず、学生自らが、自然への感性を高める必要があるというのが、導入の理由である。ネイチャーゲームを通して自然への感性を養うことによって、学生の視点が徐々にまわりの環境を捉え始める。ネイチャーゲーム導入にいたった大きな理由は、学生の自然観を育むうえで、自然への興味・関心をもつと



図3 葉っぱ遊びを通して自然理解をはかる学生。輪になってコミュニケーションをはかることも学びの1つ(環境教育フィールド演習において)。



図4 葉を使って教材作成(「環境教育フィールド演習」において)。



図2 大学キャンパスでアリなどの小さな昆虫や草本などをルーペで観察する学生(環境教育プログラム・ネイチャーゲームを導入した「環境教育フィールド演習」において)。

ともに、感性を磨いてほしいということによる(前迫2003)。

導入後、学内でネイチャーゲーム同好会が発足し、ネイチャーゲーム初級指導員資格取得をした学生は、学内だけでなく、公民館などの公共施設などでもその活動を展開している(2003年度から2006年度まで、毎年、学外で実施された学生展において実施)。

### フィールドワークを核とする教科内容

子どもの心身の成長において、生物へのいつくしみや理解、自然への興味が大きな意義をもつものであり(横井1998, 河合2003)、大学で実施されるフィールドワークが学生の自然観や生命観の育みに有効である



図5 大学周辺の神社で採集したカブトムシやクワガタを学生が飼育(授業「子どもと自然」において).



図7 伝統的野遊びの1つ. 笹船を作って水路に流して試す学生(授業「子どもと自然」において).



図6 伝統的野遊びの1つ. アカメガシワの葉でお面を作成. 教室に戻っても楽しさは続く(授業「子どもと自然」において).



図8 本学学生がササの葉で作った「笹船」に大喜びの幼稚園児(授業「子どもと自然」において).

ことが指摘されている(田羅 1998, 前迫・菅沼 2000, 前迫 2002). 大学構内およびその周辺は自然環境に恵まれている(大学付近に奈良公園があり, 植物はもちろんのこと, 野生動物としての哺乳類・ニホンジカの生態観察も可能である). 大学周辺のさまざまなフィールドでの観察や調査, あるいは昆虫の飼育などの直接的野外体験を通して, 学生は発見や驚きを示す(図5-図8). その反面, 楽しさに満足し, 問題発見や問題解決といった科学的捉え方にはいたらなかった場合も多くある.

フィールドワークへのとりくみは, 学生にも好評であるが, 一方, 目的意識が低く, 動機づけが十分でない場合には成果が得られにくい. フィールドワークは

自然環境教育の要であると考えており, 実践的で生物・自然理解につながる授業展開をさらに検討する必要があると考えている.

「国連・持続可能な開発のための教育の10年(2005年から14年)」に関連して環境教育の重要性が議論されており(朝岡 2005), 今こそ, 子どもの健やかな「心の育ちを援助する」ために環境教育の内容と方法が問われている. 子どもの心身の成長において, 生物へのいつくしみや理解, 自然への興味が大きな意義をもつものであり(横井 1998, 河合 2003, 宮野 2006), 大学においても, 知識注入型ではなく, 直接体験型のフィールドワークは学生の自然観や生命観の育みに有効であることが認識されているところである(田羅

1998, 前迫・菅沼 2000, 前迫 2002).

### 教科での学びを地域交流の場で生かすとりくみ

幼児教育科専門科目「子どもと自然」のとりくみのうち、自然体験・自然制作・自然探求などについて、学外の学生展において体験型の企画展示を行い(本学 web サイト: キャンパスライフ>学生展>[http://www.narasaho-c.ac.jp/campus\\_life/exhibition.html#top](http://www.narasaho-c.ac.jp/campus_life/exhibition.html#top) 参照.

2006.11 現在), 地域交流を推進している. 2006 年度は学生が松ボックリ, ドングリ, コナラ・クヌギの葉, マツの葉, スギの樹皮, 木の枝などで制作した遊具, 絵本, オブジェなどは, 来場者の方に好評であった.

冬のチョウを探そうという自然探求型のしかけや, 落ち葉を敷き詰めてその感触を楽しむ自然体験型展示, オナモミの棘のある果実でダーツを楽しむゲームなど, いずれも自然の生き物と自然界のしくみのおもしろさや不思議さを, いかに表現するかという学生の試み満載の企画が実施された(企画内容事例: ①ドングリとヨーグルトの容器で制作するマラカス, ②会場に敷き詰めたクヌギやコナラの落葉で木の葉合戦. ③ドングリのコマ, ④ドングリ, 木の枝, 紙粘土などでつくられたどんぐり村模型(どんぐりには顔が描かれていて, 子どもたちが楽しく遊ぶ様子を再現), ⑤壁面いっぱい構成されたクヌギの葉のトトロ, ⑥冬のチョウを探そう(ネザサの下に隠れているチョウをしゃがんで探す. 子どもたちの視線は低いため, 大人よりも多くの生きものを探し出す. 子どもは生き物探しの天才である), ⑦発砲スチロールにスギの樹皮を巻き, 頭部はアオキの葉などで制作されたゲンジボタル. 腹部のうしろに懐中電灯を入れ, ホタルが光るように制作, ⑧オオオナモミの種子形態を利用したオナモミダーツ(伊藤ふくお氏提案). 種子を毛糸製マットにあてると, ひつつく, ⑨絵本製作. 紙は段ボールの裏紙の凹凸のある紙を利用し, 文字は木の枝を使用. オブジェも葉や枝を利用, ⑩色紙で作った女の子が森を楽しく歩き, 友達もたくさん遊んでいる森の様子をスギの枝葉やヤツデの葉, 松の葉などで表現. 森の幼稚園(今井・マイザー 2003)をヒントに制作. ⑪Y字形の木の枝と松ぼっくりとゴムで作られた, 動くおもちゃ. 簡単なしかけだが, 自然素材とゴムをうまく利用し, 楽しく

遊べる(ドングリの「やじろべい」もよく知られているが, 科学心が芽生える楽しいおもちゃ. ほかに多数).

講義でのフィールドワークや「森の幼稚園」をヒントにした自然素材による作品, 植物遊び, 手作り遊具などさまざまなとりくみ展示・発表・交流にくわえて, 「子どもの視点で虫を観る」という昆虫写真家伊藤ふくお氏の講演会を実施した(学生による司会進行, 質問会なども同時に企画). これらは学生の表現力や自然理解とともに, 「子どもの視点の大切さ」をあらためて学ぶ機会の提供につながったと考えている.

図1に示したように講義時間外に奨励・サポートを行った学外でのボランティア活動, 地域との交流会, 大学におけるカリキュラムとしての講義, これらが相互に関連することで, 学生たちの興味・関心・意欲を喚起するとともに, 学生たちの自然観形成をはかり, 知識注入型の教育ではなく, フィールド活動を積極的に導入するとともに, 学生時代から地域の方々との交流などを通して, 「子育て環境づくり」に貢献しうる人材育成につなげたいと考えている.

なお, 平成18(2006)年度に幼児教育科学生・卒業生および当生態学研究室が実施した学外における自然環境教育のとりくみはつぎの通りである.

- 1 ホタルと紀伊山地吉野展(期間: 2006/6/15~20, 場所: 京阪百貨店(守口店), 対象: 一般, 内容: パネル展示. ウェブサイトに報告 [http://www.narasaho-c.ac.jp/college\\_info/event.html](http://www.narasaho-c.ac.jp/college_info/event.html))
- 2 JAならキッズクラブ(期間: 2006/7/2, 場所: 奈良県東吉野村, 対象: 小学生, 内容: ネイチャーゲーム実践および自然観察など. ウェブサイトに報告 [http://www.narasaho-c.ac.jp/college\\_info/event2.html](http://www.narasaho-c.ac.jp/college_info/event2.html))
- 3 奈良佐保短期大学公開講座(2006/8/5, 場所: 奈良佐保短期大学およびその周辺, 対象: 一般, 内容: ネイチャーゲーム実践および自然教材作成, ウェブサイトに報告 [http://www.narasaho-c.ac.jp/college\\_info/event3.html](http://www.narasaho-c.ac.jp/college_info/event3.html))
- 4 奈良佐保短期大学展(期間: 2007/2/10, 場所: 奈良県文化会館, 対象: 一般および幼児, 内容: ネイチャーゲーム実践およびパネル展示)
- 5 ネイチャーゲーム協会近畿大会(期間: 2007/3/



4, 場所：奈良県社会教育センター, 対象：ネイチャーゲーム協会会員, 内容：パネル展示)

- 6 奈良県くらしと環境フェスティバル (期間：2007/3/31～4/1, 場所：奈良県文化会館, 対象：一般, 内容：ネイチャーゲーム実践およびパネル展示)

### おわりに

奈良県内の保育所を対象にした調査から、子どもの自然観や生命観を育むことにつながる活動として、まずは「散歩」からはじまり、年齢に応じて、「飼育・栽培」、「植物など自然物を用いた制作」、「自然観察・記録」などを保育活動として実施するとともに、季節に応じた自然の移りかわりに気づかせる保育実践がなされている現状を把握することができた。さらに伝統行事など、人の生活と自然とのつながりを大事にされている側面もうかがえた。その一方、森や川など、子どもたちを保育園外で活動させるとりくみが少なく、その必要性があることを保育所が認識しながらも安全管理や保育士の確保ができていないといった問題点、あるいは保育士が自然や生きものに対するの興味が希薄であり、野外での柔軟な対応ができないなどの問題点も指摘された。

それらを踏まえて保育所が保育士養成校に要望されることは、まず、野外活動などの直接的体験を通して、自然への興味および実践力をつけること、さらに自然への感性を磨き、野外でも柔軟に対応できる保育士を養成することであったと考察される。保育現場の声を生かしながら、保育士養成校においてはカリキュラムの充実、地域との相互交流およびボランティア活動などを通して、フィールドワークを導入したカリキュラム体系と他教科との連携により、地域特性を生かした「子育て環境づくり」に貢献できる人材育成をめざす必要がある。

### 謝辞

本研究に際して、奈良県内保育所のみなさまには質問紙調査に詳細なご回答・ご意見をいただき、深いご理解を賜った。質問紙調査実施に際しては共同研究者の本学の中田奈月先生、当時、本学教員の智原江美先生、

高岡昌子先生、石田慎二先生および福田公教先生にご協力をいただいた。各位に深謝申し上げる。

なお、本研究において質問紙調査およびその解析は平成16年度文部科学省私立大学教育研究高度化推進特別補助・学術研究高度化推進経費（共同研究代表前迫ゆり）を、学内外における自然環境教育の実践的とりくみは平成18年度同研究経費（同代表）をそれぞれ使用したことを付記する。

### 引用文献

- 朝岡幸彦 (2005) 新しい環境教育の実践「子どもととなのための環境教育」シリーズ1——環境教育とは何か～目的・概念・評価, 11-29, 高文堂.
- 河合隼雄 (1998) 子どもと環境, 環境情報科学, 27: 1.
- 河合雅雄 (1990) 子どもと自然, 岩波書店.
- 河合雅雄 (2003) 森に還ろう——自然が子どもを強くする, 小学館.
- 北本正章 (1999) 社会構造の変化と子ども観の変遷, 環境情報科学, 27: 7-10.
- 厚生省児童家庭局編 (1999) 保育所保育指針, フレーベル館.
- 前迫ゆり (2002) 大学1年生の植物認識とフィールドワーク, 滋賀大学教育学部生物学実験実習書, 滋賀大学教育学部.
- 前迫ゆり編 (2004a) 地域の子育て環境づくりに向けての保育者養成における可能性と将来展望に関する学術的基礎研究. 平成15年度～16年度文部科学省私立大学教育研究高度化推進特別補助学術研究推進特別経費報告書.
- 前迫ゆり (2004b) 短期大学におけるネイチャーゲーム初級指導員養成講座実施報告, 奈良佐保短期大学研究紀要, 11: 55-8.
- 前迫ゆり・菅沼美子 (2000) 幼児教育における「環境」領域の視座, 奈良佐保短期大学研究紀要, 8: 21-6.
- 前迫ゆり・智原江美・石田慎二・中田奈月・高岡昌子・福田公教 (2004) 地域の子育て環境づくりに向けての保育者養成校の課題と視座——奈良県内保育所の実態調査を通して, 奈良佐保短期大学研究紀要, 12: 27-44,

- 宮野純次（2006）自然体験学習論～豊かな自然体験学習と子どもの未来（降旗信一・朝岡幸彦編）——環境教育における自然体験学習，118-121，高文堂.
- 文部省編（1999）幼稚園教育要領，フレーベル館.
- 沼田眞（1982）環境教育論——人間と自然とのかかわり，東海大学出版会.
- 沼田眞編（1987）環境教育のすすめ，東海大学出版会.
- 小川博久（1998）子どもの遊びと環境の変化-変わりゆく「子どもの遊び」の意味と環境の変化，環境情報科学，27：20-24.
- 田羅正伸（1998）フィールド学習の意義，理科の教育，47：4-7.
- 上野ひろ美（1999）発達の「場」をつくる——まなざしで向かい合う保育，高文堂.
- 横井一之（1998）地域の自然を生かした教育，一宮女子短期大学研究紀要，37：285-294.
- 吉田一良（1998）子どもと環境をめぐる問題群に関する一考察．環境情報科学，27：2-6.
- 養老孟司（2003）バカの壁，新潮社.

付表 1. 保育所で実施されている自然と関連する保育活動内容と実施上の問題点. 2004 年に実施された奈良県内保育所アンケート (対象 215 園・回収率 42.8%, N=92) で記述された回答から抜粋して掲載.

No.	2 歳児の活動内容	実施上の問題点
1	四季を通じて園周辺を <b>散歩</b> する. 遊びや活動内容によって散歩コースを選び, 季節の移り変わりを <b>五感を通して感じる</b> . 自然物 (昆虫・木の実・葉っぱ・草花など) を <b>採集</b> したり, それを使って制作する. 散歩コースの自然を子供たちがお気に入りのお話の舞台に見立てる.	環境の変化により自然物にはほとんど触れさせてあげたいけれど, <b>衛生上</b> の問題が大きくなってきている. 子供の好奇心を満たすように制限は最小限にとどめ, 帰ってきてからしっかりと <b>手洗い</b> をするよう子供たちを促すなど工夫している.
2	まわりを田畑に囲まれており四季を通しての <b>散歩</b> , <b>イチゴ狩り</b> , <b>芋掘り</b> なども地域の方の協力で実施. 保護者会の協力で移動動物園を呼び, 年 1 回 <b>動物とのふれあい</b> を実施.	時代が変わり, 散歩上の <b>安全</b> が不安.
3	<b>昆虫などを飼育</b> する. 草花を育てたり地殻の道を散歩し草を摘んだり落ち葉やどんぐりを拾って遊んだりする.	2 才 3 才混合クラスなので, 子供がすること保育士がすることの境界が見極めが難しい.
4	カタツムリの <b>飼育</b> , どんな動きをしているか, 形は? 食べ物はどんな物を食べているか, フンは? 等の問いかけをする.	<b>衛生面</b> において手に直接触れると石けんでよく洗う. 興味がありすぎて一人占めしたりきつく触って殻をつぶしてしまう.
5	<b>散歩</b> などで <b>自然に触れ合</b> ったり, 目的を持って捕獲し園で飼育しています. それを <b>観察</b> したり <b>表現活動</b> に生かしている.	衛生上の問題点に注意している (手洗いなど). 親自身が自然とのふれあいが希薄で子供と共感できない親が多くなってきている.
6	<b>小動物</b> を園で <b>飼育</b> する. 自ら世話をすることで興味を持ち大変さを感じ命の重みを知ることは大事と考える.	毎年「蚕」を育てているが, その命を頂き糸を取るという作業での子供たちへの説明, 理解を十分に行う.
7	四季を通してその季節に合う <b>小動物や植物に関心</b> が持てるよう, 目的を持って <b>散歩</b> を計画的に行っている.	年齢的なこともあり <b>衛生面</b> での手洗いの徹底をすることが難しく, 室内での飼育活動が難しい.
8	<b>木の葉や木の実</b> を拾っていろいろな物を <b>制作</b> して遊ぶ.	園周辺が年々, 住宅開発などで自然物を拾ったり遊んだりする所が <b>減少</b> しつつあること.
9	保育所で飼っている生き物 (ウサギ, カブトムシなど) や園庭, 散歩などで見つけた生き物 (カタツムリ, アリ, ダンゴムシ, チョウなど) を <b>観察</b> したり, <b>触</b> てみたりする.	園外の <b>自然も減少</b> していく傾向にあり, 身近なところで見つけたり触れ合うことが難しい. 命あるものを大切にしたり慈しんだりすることを伝える難しさを感じている.
10	<b>自然</b> に触れ, 自然に働きかけその中で発見する喜び, 友達との共感などは <b>戸外活動</b> をふんだんに取り入れていることでできています.	まだまだ自然が多く残っている地域ではありますが, 戸外に出ることで <b>危険</b> はあります.
11	小鳥, 金魚, 昆虫の飼育, 季節の花を植え水遣り虫取りなど世話をする. 寒肥作業をする. 花の絵を描く. <b>自然物</b> (砂, 木, 木の実) などで制作する. <b>園外散歩</b> に出かけ, 自然物や四季の自然に触れる.	<b>保育士自身が自然に興味を持つ事から指導</b> してゆかなければ保育者の内容に発展しない.
12	<b>散歩</b> で園周辺を歩き, 季節を感じながら草花を見たり触れたり摘んだり, 又, 木の実を拾ったり虫や小動物を見つけ <b>観察</b> などして親しむ.	園周辺の <b>交通量</b> が多く, 歩道に段差や傾きが多く歩きにくい, 又, 散歩車を使用する時も坂道が多く, 歩道が狭い.
13	園庭, 園の付近を <b>散歩</b> して小動物, 植物, 事物に触れたり出会う. 散歩や園庭で見つけた <b>小動物</b> を保育士が世話をしているのを見たり手伝ったりする.	自然物又自然界の事に関心や驚き, <b>不思議を感じない保育士</b> が多い. 特に名称やその他の特徴, 飼育栽培の仕方を知らない人が多い.

付表1. 続き

14	保育所周辺は <b>自然</b> が少なく、2歳児位の年齢が自然とかかわって遊べる場所は距離的に遠い。保育所や周辺で気付いて遊べるようにしている。	<b>自然環境</b> が豊かでない。
15	<b>散歩</b> に出かけて触れたり、また園庭などの植物に興味・関心を持たせたりしている。 <b>小動物</b> なども <b>観察</b> をしたり <b>飼育</b> をしたり生命の大切さを知る。	生命の大切さや共存して生きていることに気づかせることが大切とわかっているが、今〇-157など <b>感染症</b> などの問題もありなかなか飼育することが難しい。
No.	3歳児の活動内容	実施上の問題点
1	<b>動植物</b> を育てたり世話をすることで生命の尊さや愛情を持つ。	最近、 <b>アトピー</b> や <b>アレルギー</b> の子が多くなり動物の毛や羽等に触れない子がいる。
2	園庭での活動は4、5才児が主なので見学参加がほとんど。芋掘りに参加。	土を耕すことより、虫が怖い、嫌い、汚れるなど作業が進まない。
3	園内外の <b>探索活動</b> や菜園活動の <b>観察</b>	<b>危機管理面</b>
4	身近な小動物を飼育し、保護者と一緒にエサをあげたり水替えをし、成長の様子を見る。	田んぼがあってもおたまじゃくしがいないことが多く見つけられない。
5	季節に応じた <b>小動物</b> の <b>飼育</b> をする	<b>衛生管理</b> に注意する。
6	園内の「 <b>冒険の森</b> 」で遊んだり、散歩に出かけること。	近くの田畑を散策したいが、地主によっては立入禁止される。
7	年長組みの世話をしている <b>小動物</b> を見て餌を持ってきたり、親しみをもち <b>生態</b> を知る。友達のもってきたカニやカブトムシにも関心を持つ。年長組みと一緒にとってきた小動物を自然に返しに行く。	自然と触れ合う中で子供が何を感じ何に気づいたのかわかり、 <b>適切な援助</b> ができる保育者でありたい。自然事象ができたときには <b>タイミング</b> を逃さず <b>一緒に体験</b> する。
8	<b>野山</b> への散歩を通して、各季節の自然に触れる。野菜の成長に興味や関心を持つ。自然事象の変化に気づく。	同年齢児かつ少数であるため、全ての活動が4・5才児との混合になるので、どうしても背伸びした活動になっているのではないかと思う。
9	散歩で出かけた公園や園庭の石の <b>下</b> や <b>枯葉の下</b> にいる <b>小さい虫</b> をみつけている。中にはダンゴムシを捕まえたりアリやミミズの動きを追ったりしている。	捕まえたダンゴムシを観察ケースに入れず、ズボンのポケットにいっぱい入れる子供が見られる。
10	<b>園庭</b> に咲いている草花や散歩で見つけた木の实などを使って <b>色水遊び</b> や <b>ままごと遊び</b> をする。アリ、カエル、ザリガニなど身近な生き物を <b>飼育</b> し、餌を与えたり飼育ケースの掃除を手伝ったりする。	花壇で育てている花を間違えて摘んでしまうこと。動植物に対するアレルギー体質の子供に対する対応。衛生面における手洗いの徹底を充分にする。
11	<b>野山</b> への散歩を通して、各季節の自然にふれる。野菜の成長に興味や関心を持つ。冬の自然事象の変化にきずく。	同年令児が少数であるため、瀬部手の活動が4、5歳児との混合になるので、どうしても背伸びした活動になっているのではないかと思う。
12	園の周囲や地域的に自然環境に恵まれていますので、時々 <b>園外散歩</b> をしたり、秋には <b>落葉</b> や <b>木の实集め</b> 、春には草花集めをしています。冬には雪も積もりますので、 <b>雪遊び</b> も取り入れている。	園外に出かけるのに、 <b>安全面</b> にもっとも気をつけていきたい。
13	イチゴ狩り、ジャガイモ掘り、サツマイモ掘り、丸大根引きなどを行い、 <b>自然の恵み</b> を肌で <b>感じる</b> 。又、園外保育で園周辺の農道散歩に出かけ、四季折々の <b>自然の変化</b> を知り、 <b>小動物</b> にも親しむ。	植物に対する興味や親しみについては個人差はあまりなく指導にも取り入れやすいが、昆虫などに触れることについては恐がる子供もいるので個人差も配慮に入れて取り組む必要がある。



付表 1. 続き

14	園庭や近くの <b>林、野原</b> に散歩に行く。見つけたり採集した動植物を園で <b>飼育・栽培</b> する。・見つけたものでごっこ遊びをしたり、作ったりする。花壇に花を植えたり種をまいたり育てる。	子供が親しみを持ったり関心を示してもそれを受け止めることが出来ても継続して飼育、観察していく心やその仕方等に <b>力不足</b> の保育士が多い。
15	<b>身近な動植物</b> に触れて遊ぶことができるようになり、保育者や友達と一緒に探しに行ったり見せ合ったりする。	興味のある子もない子もいるので <b>保育者の感性、取り組み方</b> が重要になってくる。
No.	4歳児の活動内容	実施上の問題点
1	<b>近くの山や野原</b> に行つて木の実や季節の花を <b>集めて遊ぶ</b> 。	木の実、植物の種類が少なくなってきた。 <b>安全面</b> での問題
2	散歩に出かけ、色々な生き物を持ち帰り当番をきめて世話をする。又野菜や花などを植え、 <b>世話</b> をし、成長を喜ぶ。	生き物の死を通して命の大切さを理解させるにはどうしたらいいか「どうして死んだのか」「どうしたら死ななかったのか」と気づかせることの大切さ、難しさ。
3	年間を通して散歩を多く取り入れている。その中で出会う人々、触れ合う自然物などを体験させ <b>草花遊び</b> など保育士がして見せて模倣させたりしています。	地域の <b>安全性</b> について
4	四季を通して <b>散歩</b> を楽しみ、自然と触れ合うことによりあらゆる面で知識を得、感動することを学ぶ。	保育所を離れての行動について近年いろんな問題があり、周囲を気にしながらの行動となるため、用心が必要になってきた。
5	身近な動植物の世話や自然事象に触れて <b>遊ぶ</b> 。	清潔・安全面での行き届いた知識と指導。
6	散歩に行つて季節に気づいたり、小動物や植物に触れる。	身近な自然がなくなってきた。四季がわかりにくい(冷夏・暖冬)虫やザリガニ・カタツムリが少なくなってきた
7	自然物を使っていろいろな <b>制作</b> を楽しんだ。	出来上がった作品の保存の仕方。
8	身近な小動物を見つけられるように設定したり、偶然見つけたものを <b>採集</b> したり <b>飼育</b> したりして成長の様子を観察する。	卵や幼虫の採集は子供に驚きや喜びとして伝えやすいが、継続し愛情を持って世話をしたり、 <b>命の大切さを知らせていく難しさ</b> を感じている。
9	自然に触れ、自然に働きかけ、その中で <b>発見</b> する喜び、友達との共感などは戸外活動をふんだんに取り入れていることでできている。年間を通して戸外(園庭・散歩)活動を旺盛に取り組んでいる。そこで発見した小動物、植物、実などを収穫する喜びも得ている。	小動物を見つけ持ち帰るが世話を指導するとなると、つい死なせてしまうので、いつも子供が喜ぶことと気の毒な面を感じる。
10	園外保育で公園の <b>どんぐり拾い、落葉拾い</b> は楽しく、大小様々の <b>作品</b> が出来、子供たちにとって二重、三重の楽しさがある。いも掘りは5才児と同じ。	交通事故、不審者の出没、小さな命を預かる保育園として園の外に出る事そのものが大変な時代です。
11	園外保育に出かけて経験したことや、採集した材料を使って制作活動をする。 <b>川遊び</b> で季節を感じる。誕生会に季節の野菜や花や実を紹介する。	保育士の資質とも係わる。

付表1. 続き

12	飼育活動(カニ, ザリガニ, カブトムシ, オタマジャクシ, カタツムリ, 青虫, カメ). 菜園活動(トマト, メロン, キュウリ, チューリップ)…ふれあい遊びに発展させていった. 散歩(みかん狩り, 探検, たけのこ堀, 自然物を拾う, 草花の観察, 氷, 雪に触れる)…自然物を使って遊ぶ.	保育室が2階で園舎内に畑を作るスペースがほとんどなく, ベランダでプランターを使っての採園活動のため日当たり, 水遣りなどかなり気を使った.
13	園庭や近くの山, 川, 野原などに出かける. 草花で遊ぶ. 虫取りをする. 飼育栽培をする. 自然物で遊ぶ. 身体表現, ごっこ遊び. 造形の方々に展開絵本, 図鑑などに関心を持つ. 天体事象に関心を持ち観察をする.	身体表現などで近頃の子供の身体が非常に硬くなっている.
14	散歩や戸外遊びで草花に触れたり虫取りを楽しんだりしています. 又, 自然の移り変わりなどに関心もてるよう田の季節の移り変わりを見たり, 落ち葉や冬は氷や雪, 北風など, みんなでみつけ身体で感じられるよう心がけている.	命について物のような感覚がある子供にはみんなで考えるようにし, いのちの大切さを感じられるようになって欲しいです.
15	園外へ出かけ, 自然の中へ出向いて実際に触れたり見たりして遊ぶ.	交通量が多く, 危険箇所が多い.
No.	5歳児の活動内容	実施上の問題点
1	まわりを田畑に囲まれており四季を通しての散歩, イチゴ狩り, 芋掘りなども地域の方の協力で実施.	時代が変わり, 散歩上の安全が不安がある.
2	昆虫の飼育, 草花や野菜を育てる, 近くの川を見たり小さな山に登ったりする. 食育. 給食の際に出る野菜くずを利用した肥料作り.	特に問題はなく, ほとんどが団地の子供たちであり, 保護者からまわりに自然があっても家庭ではなかなか親しめないので, 保育所での取り組みは喜ばれています.
3	世代交流農園 苗付け～収穫まで, 毎日水やりを日課として生命の大切さを知る. 最後に地域高齢者卒園児と共に大きく収穫祭で祝う. 園内環境作り, チューリップ 500球を卒園に向けての思い出作り. 園外保育 山, 川, 野原で自然観察. 陶芸教室.	保健衛生を考えると今までのように参加工程に注意することが多く, 自然にままにできにくい. 体験学習を重視するので電車等も利用することが多いが子供に社会治安が合わず自由にのびのびと進行できないのが現実である.
4	野菜, 草花などの成長と観察. 昆虫など近辺に行く季節を知ることができる小動物もたくさん見られる.	土や砂, 虫などがさわれない子供が増加しているように思う.
5	飼育・菜園活動, 自然事象を取り入れた遊びの展開	自発性を促すような指導方法
6	飼育・栽培を通して動植物がどのようにして生きているのか, 育つか興味を持ち生命が持つ不思議さに気づくようにする.	植物を十分に育てられるスペースがない. 日当たりが悪く水やりもしにくい. 観察はすぐにできるがその場で食べることができない.
7	野菜や花の水やり, 草引きをすることを通して動植物も生きていることを実感する. 田んぼの稲の成長を見て, 毎日食べている米のできるまでを話し合う.	自然と触れ合う中で子供が何を感じ何に気づいたのかわかり, 適切な援助ができる保育者でありたい. 自然事象ができたときにはタイミングを逃さず一緒に体験する.

付表1. 続き

8	季節ごとに <b>自然事象</b> に親しめるようにしている。雨降りの後の散策や氷作りなど子供と一緒に発見できるように環境を整えている。図鑑や辞書などを用意し、自分の目で確認できるようにする。	自然事象なのでタイミングを逃さないようにするのが難しい。また子供の目だけでは発見したり掘り下げて考えられないこともあるので保護者が導くきっかけを作ることもある。
9	実際に体験した中から <b>不思議</b> に思ったことを <b>図鑑</b> で調べたり、 <b>飼育や栽培活動</b> に進んで取り組めるようにする。	実際に体験することが自然に恵まれていながら、活動しきれていないところがある。 <b>家庭での体験も少ない</b> 。
10	山や川などの自然の中で遊んだり、自然物に触れて遊ぶ。 <b>自然物を使って遊ぶ</b> （染め物、シャボン玉、あぶり出し、氷作りなど）。飼育動物の産卵。	<b>山や川などの自然</b> に触れさせたいと思うが、天候などに左右されて経験できないこともあった。
11	園周辺に散歩に生き、草花や木の葉っぱの色の変化に気付いたり、小動物を見つけ、 <b>図鑑で調べたり</b> する。	事象に興味をもてない子どもも多く、触れたり、手が汚れたりすることを嫌う子もいる。
12	園外保育や戸外遊びを通して気付いたり、感じたりした事を大事にし子供達と一緒に <b>図鑑</b> で調べたり、氷作りや虹作りなど、季節感ある遊びを取り入れたりしている。子供達が疑問に思ったことや発見したことを進んで絵本や図鑑で調べたりする態度う大切にしている。	その時ではなく、見たり、触れたり親しんだり出来ない物もあるので、逃さないようにすることと、保育者自身が自然に対して感性を豊かにし、子供達に興味、関心をもてるように働きかけることが大切だと思う。
13	6才6キロ保育活動を実践。この活動は季節の移り変わりや奈良の恵まれた <b>史跡文化</b> に触れて歩いたり、たくましい体と心をとの願いから取組みを始めて41年になります。又、この他、四季の花づくり活動、ふれあい菜園活動なども行っている。	特に交通ルールを守らせる。又、職員は携帯電話、笛を持ち、安全や危険に対する心構えが必要である。突然起きる問題についての確に処理出来るように心掛けているが、実際何かあった時は難しい問題もあると思う。
14	小動物（チョウ、カブトムシ、ザリガニ）の <b>飼育</b> や、植物を育てたり散策に出かけたり、様々な面から自然を感じられるように活動している。	小動物などの成長過程をわかりやすく絵にして、部屋に貼るが実際に目に見える変化がわかりにくいなどから興味も薄らいでしまっていた。そのため、世話をするのも自ら進んでやろうとすることもほとんどなかった。
15	散歩に出かけ自然物に興味を持ち、触ったり遊びに取り入れ、 <b>落ち葉の色や木の実のにおい</b> 、大きさ、硬さなど色々な <b>感触</b> を味わう。気づいたことを受け止め友達と話し合う。	色々な秋を発見する中で自由に思いついたこと、イメージを表すことなど雰囲気作りや使い方や工夫なども大切。 <b>図鑑</b> や絵本などの用意も必要。
No.	6歳児の活動内容	実施上の問題点
1	春にサツマイモの苗を植え、秋に収穫し、焼き芋パーティーをする。焼き芋をするため、落ち葉を集めたり籾殻を準備したり、春にモミをまき田植えをし、秋に稲刈りをし、脱穀し、おにぎりにして食べる。季節を経て米になることに気づかせる。	草引き、水やりなどの継続的な世話（労働）にいかにか意欲的に取り組めるか。
2	四季を保育に取り入れる。（春は草花摘み、夏は水遊び、秋は落ち葉や木の実を使い冬は寒さに負けない体力作り、雪や氷を使った遊びなど）	自然が相手なので計画通りには進まないが大きく四季を取り入れた年間計画の中で、その都度素早く取り入れていく。

付表1. 続き

3	世代交流農園 苗付け～収穫まで、毎日水やりを日課として生命の大切さを知る。最後に地域高齢者卒園児と共に大きく収穫祭で祝う。山、川、野原で自然観察。	保健衛生を考えると今までのように参加工程に注意することが多く、自然にままにできにくい。子供に社会治安が合わず自由にのびのびと進行できないのが現実である。
4	自然に囲まれた立地場所なので保育室から見える風景で山や空の色の違いも身近に感じられ、散歩にもよく出かけます。	近年、子供に対する事件も多く散歩に出かけていても人や車が近づいてくるとかなり用心が必要であるということ。
5	行事を通して自然と人間のかかわりを知る。	—
6	日本の伝統行事を保育に取り入れる（お正月、おもちつき、節分）	0157以来、衛生面が特に厳しく言われている。そのため、調理保育などかなり禁止されていることが多くなってきた。
7	地域の文化に触れる。地域の伝統行事に参加。	幼稚園児も保育園児も同じ年令の子供たち、同じ地域の子供たちとしてとらえて同じ参加をさせてほしい。地域の人たちの保育所の捉えかたをしっかりとアピールする。
8	公園や遠足、散歩に出かけたときに自然の変化や人々の様子を自分で見て、四季の変化を感じる。暑さ、寒さなど肌で感じることで着るものや生活の仕方も違うことを知る。	自然と触れ合う中で子供が何を感じ何に気づいたのかわかり、適切な援助ができる保育者でありたい。自然事象ができたときにはタイミングを逃さず一緒に体験する。
9	季節によって空の高さ、雲の形の変化に気付く、陽の高さに気付く、お正月など新しい年を迎えることに期待を持つ、又生活の様子に感心する。	お正月など伝統行事に関しては、最近の家庭ではもちつきやおせち料理などを作っておられない家庭もあったので、昔からの伝統を伝える大切さを感じた。
10	春の木々、草、花、虫、夏の木陰、花、水、虫、秋の落葉、実、冬の木々、春に向けての寒肥、花芽などに関心を示すよう働きかける。	職員同士がちょっとした変化にも気付き知らせ合うことも大切。
11	園周辺を散歩し、草、花、田、畑に目を向け、何が植えてあるか、何と言う名前なのかなど、又、季節によってどのような手入れ、仕事をされているのかなど、興味や関心を持ち散歩しながら観察する。	その日の天候や行事で、又、季節によって計画通りバランスよく散歩する事により観察することが出来ない。
12	動植物を育てていくなかで、世話をし成長することを観察し、絵に描く。散歩に育なかで畑、田の季節の移り変わりに気付かせる。	畑が狭く部屋から見えない場所にあることもあり、継続した観察がしにくい。・園周辺道路の交通量が多く、散歩に出にくい状況である。
13	特に冬の生活（雪国の様子、南極の様子）を中心に気温と衣服や冷暖房器具の使い方など。秋から冬にかけての動植物のすごし方、水栽培、飼育のカメや植物の冬支度をする。	目の前の雪、氷は解っても、他の県国の様子には目を向ける感性や関心を持ってくれる保育士が少なくなっている。
14	小動物の飼育や植物、野菜の栽培をし、成長や変化を観察する。自然の変化に対するつぶやき、発見、疑問を皆に知らせたり、図鑑で調べたりする。	小動物の飼育ははじめは皆興味を持っていたが、あまり変化がないと（特に冬）世話をしなくなる。
15	季節の移り変わりを覚えるために散歩に出かけて自然に触れたり、また幼虫など飼育し観察する。	身近な動植物に親しみ、いたわったり進んで世話をしたりするが衛生面など配慮が必要。



付表 2. 「こどもが自然と関わる活動」を実施するうえで、「保育士養成校において必要」と考えられる自由記述回答。奈良県内保育所における質問紙調査（2004年2月調査実施。調査対象：奈良県内215保育園；回収率42.8%；有効回答数：53）。 ※抜粋して掲載

No.	保育士養成校にたいする具体的要望
1	小動物等についての基礎的知識が必要。地域により小動物の知識は違うと思う。動物の安全性・危険性について最小限の知識は必要。
2	室内における机上での学習・研究も必要であるが、どんどん戸外に出て自然の中に身をおいて全身で自然を感じるような活動を取り入れることが必要。
3	自然物（草・花・木の葉・木の実）を使った遊びなどを知っていればよい。動植物の名前、特性などを知っていれば子供たちに色々な言葉かけができ、人的環境も良いと思う。“感心する心”を常に持つこと、色々な体験を自分の中で蓄えておくこと。
4	季節ごとに見られる草花について名前やそれを使った遊びを学習する。昆虫や小動物を飼育したり観察する。季節ごとに見られる自然現象やそれが見られる訳を知る。田畑で作られている農作物について名前・作る時期・収穫の時期を知る。
5	草花の栽培。子供の遊びにつながるような木の種類を知る。木の葉や木の実、草花を使った遊びを知る。
6	保育士自身が興味を示し、実践していく姿がほしい。そのためには小動物を嫌がったりせず植物の育成等より生き物を育てるところから、子供育て、保育に大切な心が育つと考えている。
7	保育士自身の感性が豊かでなければならぬと考える。驚き、感動、好奇心などが必要。
8	若い保育士は自然の中で遊んだ経験が少ない者も多くいるようである。机上だけでなく体験を通して知ってほしい。
9	図鑑（植物・動物）を活用することが多くある。子供たちはこれらに大変興味を示す。これを参考にしていきたい。
10	動植物にじかに触れて、まずたくさん名前を覚えること。飼育して成長の様子を観察し、感動を覚えることが、やさしさや情操を育むうえで大切なことと思う。
11	動物・小動物・植物その他見る事、触る事、聞くことなどを通して小さな動き、変化などをも含め美しいものは美しいなど心で感じるよるこび感動を育てることを感じる事が子供と共に共感できる大人、先生の育成がこれからの保育環境では必要と思われる。
12	自然に自ら関わろうとする意欲を高めてほしい。
13	興味を持つことを保育士自身が身に付けてほしい。生命の大切さや感動は自らが大切にしたい。
14	本ばかりの勉強ではなく戸外に出て自然と親しまれることが大事かと思う。子供が感動することも大事ですがまず大人がその気持ちを持ち受け入れるものを持っていないといけないと思う。
15	保育士が植物や小動物が好きでないと保育ができないので、実践に即した授業が必要。
16	身近な動植物についての特徴や育て方を知っておくことや、自然物に自ら触れて、その中で遊び方を発見しておく。
17	保育士が自然物を使ってどれだけ遊べるかによって保育実践が大きく変わってくる。自然との関わりは生命の大切さを知ると共に科学的な物の見方・考え方を育ててくる大切な活動の1つである。
18	自然と関わることは知識だけではなく工夫する知恵を学ぶこと、生きていく力を学ぶことと考え保育している。手足体を使い臭いや味を知るなど実際にやってみる。繰り返しやってみる。経験する中でわかっただけでなく、次にどうするかが大切と思う。
19	自然と関わることは美しく楽しいことばかりではなく、肉体的にも精神的にも大変な部分があることを知ってほしい。また、目に見えない小さなことの積み重ねが大事である。
20	いい事ばかりの自然の不思議さではない。園庭の桜の木の葉を全部食べつくすという駆除との戦いである。0才児からリサイクルや分別の実践、紙や燃えるゴミ燃えないゴミなどへの意識付けをしている。
21	保育士自身が興味を持っているか否かで全く保育内容が変わる。そのきっかけを学校が作ってほしい。ぜひ学生たちに自然のすばらしさ、おもしろさを体験させてほしい。
22	自然事象に関する知識を深め応用できる能力を養うこと（動植物の特性や用途などの知識）。

付表2. 続き

23	例えば草花を育てる、農作業体験をするなど、保育所で実際に取り組んでいるようなことを実体験されてもいいのではないかと思う。
24	自然と触れ合う場の提供、触れた喜びを共に味わい感動を周りの子供に伝える。動植物の世話を通して生命の営みを伝えられる。感性豊かな心を持った保育士を望む。
25	今は季節感のない食品がずらり並んでいる（スーパーなど）。もっと保育士自身が季節感を感じられるような場所に出向き、実習することが大切。保育士が感動できる人になること。体験こそが、その人の心を動かす。
26	子供に広く指導する際に、大人の保育士がきちんとした知識を学んだ上で手本となるような力を身に付けることは大切なことだと思う。自然と関わることで目に見えないものを見ようとしたり、聞こえない声を聞こうとするような心が持てるようにも思う。
27	頭の中や机上だけでなく、自分自身も砂、泥、自然の中に入って行って体感することも大切だと思う。“感性”を磨くことは非常に重要だと思います。感性豊かな先生につけることも大切である。
28	実際に体験し、保育士自身がいろいろな事を感じたり、学んだりすること。
29	幼い子供たちはダンゴムシ、アリ、トカゲ、カマキリ、バッタ、チョウなど、身近にいる昆虫類には目がありません。動植物に対する最小限の知識、観察力、何より感じる心、動植物も私たちと同じように、生きている生命を思いやる優しさが何よりと思う。
30	最近、虫嫌いや、昆虫や花の名前を知らない学生が多いように思う。教室の中での「自然」の勉強でなく、子供達と同じように自然の中に入り、自分の目で見たり、触れたりするような経験をたくさん積んでほしい。
31	理論に伴って、実際実技を通しての活動がより多くあれば良い。（私自身も田舎に住んでいるが、栽培等の経験も少ない）
32	花や草木の名前を知る、栽培方法を知るなど、自然とかかわる活動には知識も大切だと思う。それとともに自然との共生、命の大切さを実感できる体験を十分にゆっくりと、お願いしたい。
33	動植物についての身近にある物の知識、季節の移り変わりや植物の変化、種子、苗の植え付けの時期の知識など。
34	保育士自身が土に関わる経験がなかったり、ビルの中コンクリートの生活で成人して保育士になっている場合、園児に自然とかかわる活動を指導したり共に感動することは非常に困難である。養成校において少しでも自然に触れる体験をさしてほしい。
35	自然とのかかわりは、保育士自身の感性が大きく影響するものと思うので、まず学生時代から自然とかかわる様な体験を十分しておく必要がある。
36	養成校で十分の経験をしてほしい。小中校で充分身に付いていないものもある。経験をたくさんしてほしい。
37	保育士が自然に興味を持っているかいないかで子供の活動はかなり違う。自分の得意、不得意はいろいろとあると思うが、どんな事にも前向きに取り組む姿が一番大事である。そういう態度を養っていただきたい。
38	子供達の興味あることに大人と一緒に楽しく、共感する中で、大人との信頼関係が育っていく。散歩はその大きな役割をはたしている。小動物が大好きな子供達、目を輝かせていつまでも見たり触ったりしている。
39	動植物の名前や生態など、知識として知っておいたほうがよいと思う。また、いろいろな植物を使つての遊びや製作なども学んでおいたほうが実体験をもとに現場で生かせる。
40	小動物に触れない保育士が多くなっている。子供達の前で「気持ち悪い」など声を出し、子供達に恐怖心すら与えてしまうこともある。
41	植物・魚類の育て方、またこれは何の種、どの様に飼育していけばいいか、教える側がある程度理解が必要である。経験のない職員は間違えて教えてしまう。ある程度教えられる力をもつとともに、この年令に知らせる力を保育士養成校でつけてほしい。
42	草花の名前、遊び方（昔の遊び方、各地方の遊び方）、植物や動物の成長観察。
43	保育士自身がさまざまな物事に敏感に反応する感性を磨くことが大切と思う。保育士自身の経験と臨機応変の対応が大切。

## Nature Activities in Childcare Centers and the Education for Natural Environment in a Professional Training College

MAESAKO Yuri

This study was carried out as a part of “Fundamental researches in a professional training college for childcare workers with the aim of contributing to regional child-rearing environment”. The author reports the childcare activities concerned with nature for children from 2 years old to 6 years old in nursery schools and proposals from nursery centers to the professional training college on the basis of the questionnaire answered by childcare centers in Nara Prefecture (the collection rate of data was 42.8% in 215 childcare centers in 2004). Furthermore, I report the education for natural environment in the professional training college with the aim of contributing to regional child-rearing environment. The investigation indicated that a walk and a flower play were routinely taken for nature activities of younger ages, and nature activities such as breeding, cultivation, production, observation and recording were taken for older ages according to seasonal changes in childcare centers. The investigation in childcare centers also indicated that nursery school teachers should flexibly act in the outdoor and keep positive interests to nature. This study suggests that “direct experience learning and fieldwork activities” were extremely important in the education for natural environment in professional training colleges.

Key Words: Direct experience learning, Fieldwork activity, Education for natural environment, Professional training college, Regional child-rearing environment